

【論文提出者】 社会文化科学研究科 人間・社会科学専攻 交渉紛争解決学領域
氏名 ケオサヴァン・アーニャ

【論文題目】 Instrumental Role of United Nationalities Federal Council as an All-Inclusive Platform for the Ethnic Groups in Burma
(ビルマの少数民族のための共通プラットフォームとしての The United Nationalities of Federal Council (UNFC)の役割について)

【授与する学位の種類】 博士（学術）

【論文審査の結果の要旨】

ケオサヴァン・アーニャ氏の論文「Instrumental Role of United Nationalities Federal Council as an All-Inclusive Platform for the Ethnic Groups in Burma」は、ビルマ内戦の平和構築の過程において The United Nationalities of Federal Council (以下 UNFC と呼ぶ) がどのように機能し役割を果たしているかについて、主にフィールド調査に基づいて明らかにした論文である。UNFC は、ビルマの少数民族の共同プラットフォームとして 2011 年に設立された。

氏は最初に、ビルマ内戦に関する歴史的概観を文献に基づいて行い、次に、ビルマ内戦に関する 2013 年時点でのステークホルダーの分析を行っている。ビルマにおける現在の主な政治勢力としては、テイン・セイン政府、アウンサン・スーチーによって指導される NLD、11 の少数民族の連盟としての UNFC の三勢力があると指摘する。これは、過去においては各少数民族が内戦の中で分断して存在していたが、2011 年に 11 の少数民族の連盟として UNFC ができたことで、テイン・セイン政府に対して少数民族が共同して交渉などを行っていくための共通プラットフォームが形成されたことで、このような勢力関係として整理されるようになったと氏は分析する。

次に、論文の主要部として、氏は、2012 年 8 月と 2013 年 8 月行ったフィールド調査に基づき、UNFC のより具体的な機能や役割を明らかにしていく。フィールド調査では、氏は、少数民族幹部や UNFC 本部へのインタビューや、UNFC 関係者の活動への参与観察により情報を収集した。フィールド調査の結果、氏は、(1) UNFC は、第一に、各少数民族をすべて含む形での対話の場を与え、テイン・セイン政府との政治的交渉を可能にする共同プラットフォームとして機能しようとし始めていること、(2) 各少数民族が、政治的理念の傍らの現実として、ベーシック・ヒューマン・ニーズが満たされていないという現状に対して、UNFC は、教育、医療、農業、コミュニティの能力開発を支援するための Ethnic Affairs Center を構想しつつあること、が発見されたとする。また、それらの開発にかかる予算も含めての UNFC の財政は、日本財団がほぼ唯一にして強固な基盤を与えていることも述べている。このような中で UNFC は、各少数民族に対して財政的援助を含めて基本的ニーズを供給する役割、紛争解決スキルを教育する役割、関係構築をする役割、メディエーターあるいはバランスを取る役割など、平和構築における多様な役割を果たしつつあり、またできだろうと氏は指摘する。

UNFC については、2011 年に設立されたもののニュースなどで報道される以外にはアカデミックな研究蓄積は多くなく、ヴェールに包まれている部分も多かった。氏の論文は、その UNFC の機能と役割に関する実態を、少数民族幹部や UNFC 幹部への直接のインタビュー調査や訪問調査を行うことでより明らかにすることを試みたもので、特にビルマ内戦での平和構築や紛争解決学の領域に新しい知見を加えた研究論文であるといえる。

氏の論文は、最初に自らが明らかにしたい研究課題として「UNFCや中間エージェントの機能的役割と、それらがビルマの平和構築プロセスにどのような影響を与えたか」ということを挙げているが、それは、2011年以降に始まったUNFCの動きを2013年までの期間でインタビュー調査などするだけでは、その影響についてはエビデンスをもって評価できるには至らなかった。その意味では、自らが立てた大きな研究課題に正面から答えきれていないという不十分な点もあるが、それは研究課題の立て方自体が大きすぎるという問題にも由来する。一方で、ビルマ内戦というきわめて過酷で長期にわたる内戦の平和構築の道筋にとって重要な意味をもつビルマの少数民族の共同プラットフォームとしてのUNFCの実態に関する新知見については、調査に基づいて十分に示しており、博士論文としての水準に十分に達していると判断する。

以上の所見により、本論文を学位論文として適格であると判断する。

【最終試験の結果の要旨】

上記の者に関して、平成 27 年 1 月 29 日（10：30～11：30）、文法棟小会議室において口述試験を実施した。また、上記の者は、同年 1 月 31 日（11：00～12：00）、文法棟 A 2 教室において、学位論文について公開発表を行った。口述試験における審査委員と公開発表における聴衆からの質疑に対して、適切な応答がなされた。

氏の論文「Instrumental Role of United Nationalities Federal Council as an All-Inclusive Platform for the Ethnic Groups in Burma」は、ビルマ内戦というきわめて過酷で長期にわたる内戦の平和構築の道筋にとって重要な意味をもつビルマの少数民族の共同プラットフォームとしての UNFC の実態について、少数民族幹部や UNFC 本部へのインタビュー調査や、UNFC 関係者の活動への参与観察調査により明らかにすることを試み、特にビルマ内戦での平和構築や紛争解決学の領域に新しい知見を加えた研究論文であるといえる。

上記の最終試験の結果、上記の者は、提出された論文に関連する専門領域についてすぐれた学識を有し、自立して研究を行う能力が十分にあると判断され、審査委員会は、博士（学術）の学位を上記の者に授与するに値すると判定するに至った。

【審査委員会】

主査	石原	明子
委員	岡部	勉
委員	林	一郎
委員	阿部	悠貴
委員	平野	順也